

# イチャイチャ知漢電車

同窓会で集った女性専用車両は痴漢OK!?

立ち読み版

狩野 景

[挿絵] 加藤いつわ



## 登場人物紹介

Characters

「わたしって、  
魅力……ないですか？」



みやざえすずり  
**宮佐枝涼鈴**

聖ルチオ女学院に通う初心  
な女生徒。電車でお年寄り  
に席を譲った姿を見て、洋  
太のことを気になっていた。  
恵梨沙と柚子に誘われて痴  
漢OK車両に乗っていた。



おうすみようた  
**応隅洋太**

東凜学園に電車に通学  
する男子生徒。偶然、  
痴漢OKな女性専用車  
両に乗ってしまい、恵梨  
沙たちに誘惑される。

「ここは痴漢専用車両で、  
あたしは女できみは男なんだから♪」



ほうまい ゆず  
**芳舞柚子**

涼鈴や恵梨沙のクラスメイト。小柄な体格ながらも非常に力が強い。人懐っこい性格で、エロいことにも興味があり、洋太を誘惑し始める。



そうが えりさ  
**相賀恵梨沙**

エロいことに興味津々な少女。涼鈴や柚子とはクラスメイトで、涼鈴の恋を応援しようといろいろと協力するのだが、洋太に興味を持ち始めて……!?

「洋太くんば、  
触ってくれるよね？」

第一章	その車両、女性専用につき
第二章	柚子との遭遇
第三章	おかしな二人
第四章	涼鈴
第五章	痴漢という名の電車
終章	洋太の充実

## 第一章 その車両、女性専用につき

すっかりと寝過ごしてしまった。

最近ハマってるソーシャルゲームで資材ほぼ全部消費してイベントクリアした後、すぐに寝ていればよかったのだけれど。

興奮して目が冴えてしまい、買ったまま積んであったラノベをつい手に取ってしまったのがいけなかった。引き込まれるように一気に読み終えると、窓の外はもううつすらと明るくなり、スズメがチュンチュン鳴く声が聞こえていた。

急激に襲ってきた睡魔に目を閉じ、目覚めた時にはいつもなら家を出ている時間を十分ほど過ぎていた。

このところ遅刻が続いていたので今日こそは始業時間に間に合わない、担任教師にネチネチと説教された挙げ句、ペナルティの課題を山のように出される。

「シャレにならないぞ、それ、でも急げば、まだ間に合うっ！」

月曜日の朝、応隅<sup>おうすみ</sup>洋太<sup>ようた</sup>は大急ぎで制服に着替えると駅まで全速力で向かった。改札を通り抜けると同時に、電車がホームに停車した。

(この快速に乗れば確実に間に合うっ!!)

次の各駅停車だと駅からまた学園まで全力疾走で、ギリギリ間に合うかどうかだ。だが家からここまでで、すでに体力は使い果たした。無理。

「その電車、待てえつ。ぬおおおっ！」

最後の力を振り絞ってホームを駆け抜け、いま閉まろうとしているドアに飛び込む。「はあ……、間に合った」

前屈みに膝に手を着いて、乱れた息を整えようと大きく深呼吸する。

その鼻腔にいつもとは違う、甘く心地よい香りが流れ込んできた。

（ん……？ 何だ……）

違和感を覚え顔を上げると周りにはみな女性ばかりで、訝いぶかしむような目で洋太を見ている。（やばいっ！ ここって、女性専用車両!?）

全身から血の気が引いた。

改札から一番近い最後尾の車両。いつもは間違えて乗らないように気を付けているのに、焦る余りついうっかり飛び乗ってしまった。

（や、やばい、どうしよう?）

このままでは変質者扱いされかねない。下手をすれば何もしていないのに痴漢の嫌疑を掛けられて警察に突き出されるかもしれない。そんなことになったら、人生お終いだ。

（次の駅ですぐに降りて、他の車両に移れば……。って、そもそも俺が降りる駅だし）

快速列車はかなりの駅を飛ばすので、しばらくは停車しない。

「見ない顔の子ね。東凜学園の生徒みたいだけど」

「知らないで乗ってきたのかしら？」

「どうしよっか……？」

動転して固まっていると、女の子たちのグループが洋太を見ながら、ひそひそ声を交わしていた。制服から通っている学園まで割り出されてしまったらしい。

次の駅で痴漢の濡れ衣を着せられて駅員に引き渡されてしまうかもしれない。

(こうなったら、ここを通り抜けて隣の車両につ!!)

両手を真上に挙げて触る意志はないことを示し、身体が触れないように避けて突破すれ  
ばと、車内の混み具合を確かめる。

「なっ!？」

だが目を向けた車両の奥では、信じられない光景が繰り広げられていた。

「ひっ、い、いやああ……」

「くふふ、そんなこと言いながら、ここはぐちよぐちよに濡れちまつてるぜ」

「はあ、あああ、誰か、助けて……、この人、痴漢っ、あ、あああつ!! 太いの、入っちゃつてるううっ」

「これ見よがしにエロい格好してるお前が悪いんだよ。本当は誘ってたんだろ？」

女性専用車両だというのに何人もの男たちが乗り込み、大胆な痴漢行為を働いていた。

しかも他の女性客たちはすぐ側で繰り広げられている痴態に気付かない振りをしてるばかりか、次は自分へと痴漢を誘うかのように肌の露出度を高めて無防備な態度を晒していた。

「えっ、何で。止めなくていいのか？」

不思議な光景に唾然と立ち尽くしていると、先ほどひそひそ話をしていた少女たちに取り囲まれていた。

「うわっ！ ご、ごめん、俺これが女性専用車両だって確かめないで乗っちゃって!! エロいこととかそういう気持ちには全然ないし、次の駅ですぐ降りるから。そ、それより、あれ……。あんなことされてるのに、何で誰も何も言わないんだ!？」

慌てふためきながらまくし立てると、女の子たちが身体を擦り寄せてくる。

「やっぱり何も知らないで偶然乗ってきたみたいね」

「見た感じも真面目な童貞くんだし、噂を聞いたわけはないっばいけど〜」

「でも、この車両に乗っちゃったんだから、ルールには従ってもらいましょう」

「へっ？ えっ!! な、何をっ！ うわっ、ちよ、ちよっと、あ……当たってるっ。やばいっばっ!!」

仄かな甘い香りを漂わせながら押しつけられる柔らかな胸の膨らみや太腿の感触に動転



して危機感を覚える。

(ああダメだ、触っちゃッ。俺、痴漢にされちゃう。警察に突き出されるっ)

「怖がっちゃって、可愛い」

「こんなに怯えてくれると、痴漢しがいがあるわね」

(痴漢しがいがあるって、陥れる気、満々じゃないかっ。ああっ、冤罪だっ。俺は無実だっ!!)

実際にエッチなことをさせて言い逃れ出来なくしようとしているのだろう。少年の手を取ってスカートの中に導こうとしながら、彼女たちの手も洋太の股間とかお尻とかに伸びてくる。

「た、助けて……くれっ!」

必死に拒みながら逃れようとする、少女たちがますます喜ぶ。

「捕まえたっ♪」

「ひああっ!」

背後から抱きつかれ、むにゅんと押しつけられた柔らかな膨らみに気を取られていると、他の少女の唇が目前に迫る。

「ああっ!!」

万事休すの状況に為す術もなく身を強張らせていると、栗色髪をした長身の女の子が触

れる寸前の唇を掌で遮った。

「はい、そこまでよ。お楽しみどころ悪いんだけど、その子あたしたちと痴漢する約束だったから。この車両初めてなので戸惑っちゃってたみたい」

「えへ、勘違いさせちゃってごめんね」

そしてもう一人の金髪ツインテールのあどけない顔立ちをした小柄な女の子が、洋太の手を引いて、背後から抱きつく少女から引き離れた。その傍らに、黒髪を三つ編みに纏めた生真面目そうな女の子が、少し頬を赤らめた居心地悪そうな顔付きで寄り添う。

三人共、桜色のブレザーに濃い紫色のディアンドルを合わせ、丈の短い苺色チェックのミニスカートを穿いた姿から、洋太が通う学園から二つ先の駅にある聖ルチオ女学院の生徒だとわかった。

近隣の男子生徒たちにとって憧れの存在であるお嬢様学園。他の少女たちとは佇まいからして違う三人のそれぞれ個性を際立たせた美貌に、洋太を痴漢にしたてようとしていた女の子たちが気圧されたように後ずさった。

「そ、そうなんだ。ちょっと地味だけど顔付き悪くないし、痴漢にイイかなって思ったんだけど、先約があったんじゃないや仕方ないわよね」

誤魔化し笑いを浮かべながらすすりごと離れていった。

「は、ありがとう、助かったよ。危うく痴漢扱いされるとこだったあ……」

もし警察沙汰になんかされていたら人生終わっていた。安堵しながら助けてもらったお礼を言うと、三人は洋太の顔をじっと見詰めてきた。

「しかし、何なんだよこの電車は！ あんなことされてるのに、何で誰も何も言わないんだ!？」

女性専用車両に乗ってしまったことを咎められているのかと思ひ詫びながらも、周りで繰り広げられている淫靡な行いに激しい違和感を覚えた。

動転しながら尋ねると、栗色の長い髪を背中に垂らす目鼻立ちのはっきりした活発そうな少女がクスッと小さく笑った。

「本当に偶然乗っちゃったんだね。でもこれって運命の巡り合わせなのかもよ」

金髪ツインテールの小柄で童顔な、人形のように可憐な美少女が舌つ足らずな口調で言いながら迫ってくる。

「はうっ」

背が小さくて体格も華奢なのに、やたらと胸が大きい。その膨らみが、見下ろすとイヤでも目に入ってしまう。

「うんうん、確かにチャンスよね、これって」

長い栗色髪の少女も息が掛かるほど近くに身を寄せてきた。大ききこそ小柄娘に負けるがブレザーの上からでも分かる美麗なお椀型の膨らみが、背丈の分だけ目の前に迫って見

えてしまう。

(な、何なんだ？ これってっ)

痴漢冤罪から逃れたと思っただのに、助けてくれた女の子たちまでもがさっきの少女たちと同じように洋太に迫ってきていた。

「実際に近くで見るとやっぱり地味だけど顔立ちは確かに悪くないわね。話した感じ、性格もスレてないし、いいんじゃないかな？」

「うんうん、いいんじゃない〜♪」

値踏みするように洋太をジロジロ見ながら、納得したようにうなずき合う。

(な、何なんだ？ 俺の顔がどうしたっていうんだ？ この子たち、前に会ったこと……なんてあるわけないよな)

痴漢の罪を着せようとしているわけではないらしい。まるで以前から洋太のことを知っているような口調に戸惑い、途方に暮れていると、内気そうな三人目の少女が怖ず怖ずと二人に声を掛けた。

「やっぱりやめようよ、恵梨沙ちゃんも柚子ちゃんも。私、やっぱりこういうこと……。それに……」

長い黒髪を三つ編みに纏める、おっとりとした上品な顔立ちはお淑やかな物腰と相まって、いかにもお嬢様学園の生徒に相応しかった。だが、その胸で圧倒的な存在感を示す胸の膨

らみは、連れの二人を遙かに凌駕するポリウムで洋太の目を釘付けにした。

「涼鈴<sup>すずり</sup>ってば、いまさら何を言ってるのよ。わざわざ彼の方から飛び込んできてくれたのに。まさにチャンスじゃないの！」

「でしよでしよ。涼鈴ちゃんってばこのままじゃ、経験どころか男の子と手をつないだことないまま、処女膜無傷ババアになっちやうよ〜」

「はうっつ」

柚子と呼ばれたツインテ娘の品性が欠けまくった言葉に、頬を赤らめて恥じらう。

(こっちの二人も美人だけど、この子、可愛らしい。それに、おっぱい大きいし)

混乱しながらも、お嬢様学園に通うスタイル抜群な美少女たちに取り囲まれて、男の本能には抗えず色々と目を奪われてしまう。涼鈴という名前らしい少女の奥ゆかしい様に心惹かれつつ、圧倒的な膨らみの胸に視線を注ぐ。

「それに彼ってば、涼鈴の巨乳がすぐ気に入ったみたいよ」

そのことを恵梨沙という名前らしい少女が、あつけらかなとした声で伝えた。

「きゃっ！」

「はうっ、ごめんっ!! 別に見るつもりじゃ……っ」

ますます頬を赤く染めて両手で膨らみを隠すお淑やか少女に、少年も顔を赤らめて慌てて目を逸らす。

「この車両ってただの女性専用車両じゃないのか？ あんたたち俺をどうするつもりなんだ？」

照れ隠しに語気を強めて、この異常な状況が何なのかを恵梨沙に尋ねる。

「ここはね、知る人ぞ知る痴漢OKな女性専用車両、略して痴漢専用車両なのよ、東凜学園一年A組出席番号五番、応隅洋太くん」

「痴漢専用車両！ それと何で俺の名前をっ!! うわっ！」

淫靡な響きがする名称と、名乗ってもいないのに氏名どころかクラスと出席番号まで言い当てられて驚いていると、恵梨沙と柚子が左右から挟み込むように抱きついてきた。

「知ってるわよ、だってあんたの学園の生徒とかに聞きまくって調べたんだもん」

「だから、何のためにっ!! はうっ！」

洋太の問いかけをはぐらかすように柚子の手が、Yシャツの裾を捲り上げて制服の下に潜り込んでくる。温かく火照った小さな掌に腹部から胸板へと素肌を撫でられて、思わず変な声が出てしまった。

「いつからどうしてこうなったかあたしも知らないけれど、快速列車の最後尾の車両では痴漢したい男と痴漢されたい女が乗ってきて、通報とかされる危険なしで楽しむようになったの。あたしたちもつい最近知って、乗るようになったんだけど……。あはっ♪」

恵梨沙もやはり、洋太を調べていた理由を答える気はないらしい。痴漢行為が堂々と行

われている、まるで別世界のようなこの車両の話題に切り替えてしまった。

「おわあっ、そ、そこはっ！　だ、だめだっばっ。くはあっ!!」

柚子の愛撫と被らないように指先を腹回りに滑らせていた恵梨沙の手が、するりと滑り落ちるように股間へ伸びた。

「ああ、もうしっかり大きくなってる。しかも、かなり大きいわ、これ」

車両内で堂々で行われるエロ行為を目の当たりにしたり、美巨乳の美少女たちに迫られたりですっかりと勃起してしまった陰莖を、ズボンの上からとはいえ握られてしまった。

「だ、だめだっば、女の子が自分から、そんなところを握るなんて、あああうっ!」

男の勝手な願望だと分かつてはいるけれど、女の子には清楚でいて欲しい。

けれど恵梨沙はギッチリと充血して硬く太く膨張した男根に興奮の息を弾ませて、ゆっくり扱とき始めた。

「くふっ！　あ、あああ……。やばい、これ……」

自分の手で弄いじるより何倍も気持ちいい疼きが、充血した幹で渦を巻く。

やめさせなくちゃと頭で思いながらも、身体が続きを望んで拒むことが出来ない。

(ああ、これじゃ俺が痴漢されちゃってる？　しかもこんなに綺麗な女の子たちにつ!!)

そもそも女性が痴漢に遭わないように女性専用車両が作られたというのに、その中でお互い合意の痴漢行為が堂々で行われている。

それだけでもショックなのに、見ず知らずの美少女たちに、恥ずかしい部分を弄ばれてしまっている不条理さへの興奮が、洋太の理性をあやふやにさせていった。

「乳首も硬くなってるし、感度いいよね、洋太くんってば」

「やめっ、擦こすりたいってばっ、くひっ！ はううっ!!」

小柄な美少女の指先にコリコリと疼く充血粒を転がされると、くすぐったさの中に妙な痺れが湧き上がって身体の力が抜け落ちる。

そんな少年の反応に、あどけない顔立ちに妖艶な眼差しを浮かべて柚子が情欲を昂らせる。舌つ足らずな声を震わせ、熱い吐息をこぼしながら男根を握った小さな手に力を込めた。

「あふっ、扱けば扱くほど硬くなって、大きさもどんどん膨らんでくる。面白い、おちんちんって。洋太の、おちんちん♪」

ズボン越しにペニスを扱く恵梨沙の手も大胆さを増して、幹肉に適度な圧迫を加えながら、もっと激しい刺激が欲しくなるギリギリのところでもどかしい甘美を膨張させて、奥から込み上げてくる熱い衝動を煽ってくる。

「ふああ、洋太くんも、好きに触っていいんだよ、柚子の身体……。ここ、痴漢専用車両だから……。お構いなしで好きに痴漢して、いいんだから……」

二人共に乳房を洋太の二の腕に押しつけ、脚を絡ませ合うようにして股間も太腿に押し



当ててくる。

(はうう、おっぱいの感触っ!! す、すげえ、これがっ! 二人ともおっきいけど、それぞれサイズ違うから感触も……全然違うっ。恵梨沙って子のは弾力的で押し返してくる感じだけど、柚子って子のはどこまでも腕がめり込んで……。どっちも最高すぎる!!)

直に触れているわけではないが、夢にまで見た柔らかな感触は十分に分かった。

(それに股間……、あそこ、俺の脚に押しつけてクネクネさせて、なんだかくちゅくちゅって、湿った音聞こえてくるし……。それって、二人とも……濡れてるってことか? あ、あそこが……ッ)

服を着たままなので、どうなっているのが全く分からない。

(痴漢専用車両なら俺が二人を脱がしちゃっても、全然構わないんだよな? 股がどんな風に濡れてるのか……とか、おっぱいの生の感触とか確かめちゃっても……)

それでも童貞ならではの経験値の足りなさから、一歩が踏み出せない。

(俺も触りたい……けど……)

「はあ、あああ、洋太の胸板、乳首い……。ん、あふ、はあああ〜〜〜」

「お、おちんちんも、すごい、あああ……」

ペニスを扱き、乳首を弄りながら、胸を押しつけ股間を擦りつける。そんな美少女たちの吐息が熱を増して荒くなる。

「く……ああ、こんなこと、されたら……、やばい、つてば。俺まで、おかしくなる。こんな……電車の中なのに、お前たちに、痴漢……したくなるっ」

いままで女の子とはさっぱり縁がなかったというのに、お嬢様学園の美少女二人に囲まれて甘美な愛撫に翻弄ゆえされている。

経験の乏しさ故ゆえに触り返す勇氣も出せず、悶々とした興奮を持って余していると、それを察知したように柚子と恵梨沙が囁いてきた。

「触ってあげて、洋太くん、涼鈴ちゃんを……。あの子も、いまエッチな気分……なっちゃってる……。ふあ、は、ああ……」

「涼鈴もきみと同じように奥手で、一步が踏み出せない子なの。でも、あたしたちと同じ、エッチに興味ある普通の女の子だから、洋太が勇氣出させてあげて……」

寝不足な上に思いがけないエロな状況に朦朧あへとなった頭が、二人のお願いに揺り動かされた。

「わ、私は……やっぱり、いいから……」

美少女二人に抱きつかれ、エロい刺激に放心しかけて喘あえぐ洋太から目が離せず凝視しながらも、怯えて後ずさってしまう。

積極的に迫られるよりも、恥じらうその姿に洋太の胸が高鳴った。

「涼鈴……ちゃん……」

昂りきつた興奮に突き動かされ奥手少女へと手を伸ばすと、洋太は並外れて大きな乳房を鷲掴みにし、スカートを捲り上げた股間へ指を這わせた。

「ひゃんっ！ ああっ、いやあっ!!」

力を込めるか込めないかの内に、指先が膨らみへずぶずぶと埋まり込んだ。

シヨーツ越しにヌルヌルした雫がもう片方の手の指先を濡らし、くちゅんと艶めかしい音色を奏でた。

(こ、これが……女の子の、おっぱいっ！ すごい、何なんだこの柔らかさっ。ふわふわで温かくて、でもズシっとして。この大きさだしっ。ああ、夢みたいだ。俺がこんな可愛い女の子の、しかも巨乳揉んじやってるなんてっ!!)

いままでモテた試しなんかない。

どんな感じなんだろうと想像するしかなかったおっぱいの感触がいま現実には自分の手の中にある。

その感動に震えながら、洋太は夢中で指を蠢かせた。

(はああ、指に力込めると、こんなに拉ひしゃげちゃうんだ。潰れた形も何かエッチな感じ。でも、力抜くと、指を押し返しながらか、すぐに元の膨らみに戻るっ)

「んんっ、やあ……」

夢中になって揉む勢いを激しくさせると、涼鈴が眉根を寄せて小さく声を漏らした。

(い、いまの感じてるっ!! 俺に揉まれて、おっぱい感じちゃった?)

少女の微かな反応にも興奮が高まり、陰茎を鈍く疼かせる。

「ああ、おちんちん、ピクピク跳ねてる。涼鈴のおつきいおっぱい揉んで、その気になっちゃってるんでしょ? もっと扱いちゃお」

「心臓もドッキドキなっちゃってるね。汗、すごくて乳首ヌルヌルしてるしい」

「くふっ、そんな……、あうっ!!」

昂る少年の反応に、左右からの少女たちが敏感な部分へのイタズラを勢い付かせてからかってくる。

(俺だけじゃなくて、この子だって……。おっぱい揉まれて、あそこ……濡らしてるから) 乳房を弄る度に、内気そうな少女は身体をぴくんと震わせて股間の潤みを増していった。(ああ、ここ、割れ目になってるの分かる。柔らかくなって綻んできてる。指押し込んだら、下着ごとめり込んだじゃう……。穴……ってどこにあるんだろ。どんどん濡れてきて、すごいヌルヌルだ……)

涼鈴の呼吸が次第に艶めかしさを帯びて荒くなってきた。

乳房を揉みながら未知の女陰を、夢中になってショーツの上から探るようにまさぐる。

もっと激しい刺激で女体の快感を開花させ、涼鈴を乱れさせようと洋太が息を弾ませ血走った目で迫るが、



「や、やめて……ください。私……、こんなこと、いやです……」

大人しそうな少女の瞳がみるみる内に潤み、ポロポロと大粒の涙をこぼす。喘み殺すような嗚咽おえうに、少年の色ぼけた意識がハッと我に返る。

「ああっ！ ご、ごめんっ!! ついつ」

快感に流されてとんでもないことをしてしまった。

慌てて彼女の胸と股間から手を放して飛び退るすき。

「あらら、ちよつといきなりすぎちゃったかな」

「よしよし、怖かったねえ。もう無理にエッチなことさせないから、大丈夫だよん」  
肩を震わせ静かに泣き続ける涼鈴を、友人二人がなだめる。

その様を呆然と眺めながら、どのように詫びたらいいのか途方に暮れていると、電車が洋太の降りる駅に到着した。

「あー、悪かったわね、驚かせちゃって。この子まだ覚悟が決まっていなかったみたいで。それじゃ、下校の時にでも」

「またねー、ばいばーい」

「えっ、あの、俺……」

彼女たちにエロいことされたのが原因とはいえ、涼鈴を泣かせるような痴漢行為を働いてしまったのは自分の責任だ。

責められても仕方ないと思っていたのだけど、恵梨沙と柚子は苦笑混じりに涼鈴をなだめながら、彼を電車から降ろした。

「な、何なんだ……」

遅刻間際だというのに、洋太は電車が発した後もしばらくの間、啞然とした表情でホームに立ち尽くしていた。

※※※ ※※※ ※※※

結局、学園まで全力疾走する羽目になったけれど、どうにか遅刻はしなくて済んだ。

しかし電車の中での体験が強烈すぎて、授業なんか全く頭に入らなかった。

（痴漢専用車両……、あんなことが現実にあるなんて。それにしても何だったんだ、あれって？ また下校の時について言ってたけど……まさか……）

帰りにゲーセンに行こうという友人たちの誘いも断って、洋太は一人駅のホームに佇んでいた。各駅停車を何本か見送り、快速電車がホームに入ってくるのをぼんやりと眺める。

「あの恵梨沙……とかいう子の話だと、快速電車にだけあるみたいだけど……」

これにも痴漢専用車両なんていう、頭がおかしいと思えない車両があるのだろうか？ もし違ったら変態扱いされかねない。

「あふ、あ、あはあ、これ、身体、敏感……なつてく。どんどん感度、高まるつ。ん、あ、あああつ、先つぽでコンコン、奥……されると、ふあ、ああ、腰……抜けそう……なる」  
突き込みを繰り返しながら彼女の背中や首筋を優しく愛撫すると、電気が走ったように全身を震わせ、息を詰まらせる。

そんな光景が他のカップルにも見え始め、甘く爛れたような退廃の香気が濃度を増して車内に蓄積し、皆の理性を溶け崩してゆく。

「くふう、んう、お、おあ、おちんちんッ、洋太のおちんちん、あたしの腔内なかにあつて、あ、あはあ、あたしを、おかしくさせる、あ、はああ、ん、あ、ああつ！」

「恵梨沙の腔内も、絡みつき、すぐくなつてる。そんなに動かしてなくても、ちんこ抜くように揺さぶつてきて、気持ち良くなるつこれつ。くはあつ、俺も、ヤバくなつてる。熱いの込み上げてきて……ッ。奥からつ。ああつ！」

密度を高めて蓄積されてきた穏やかで濃厚な甘美が、許容を越えて一気に溢れ返る。  
「恵梨沙ッ!!」

引き締まったお尻を鷲掴みに彼女の身体を抱え上げると、両脚を押し広げるように腰を迫り出してさらに奥へと男根を突き入れた。

「くふうううつ、深あああああつ！ ああつ、はぐうううつ!!」  
亀頭につつかれ続けて感度の高まった子宮を、さらに奥へと圧迫する。



息が詰まる衝撃に悶えながら、恵梨沙はさらに男根を深くまで求めるように両脚を彼の腰に絡みつかせた。

それに伴って切なげに蠢く膣壁の感触が少年の昂りを煽る。

「熱い汁ッ、いっぱい溢れてきてるっ。狭い壁うねうねしながらちんこ締めつけてきてっ、くおおおっ、気持ち良すぎるッ！」

ズブンッ、ヌズヌズズズッ、ズバンッ、ズブッ、ズブッ、ズブッ、ズブッ!!

いままで抑え気味にしていた分を全て解き放つように、洋太は激しいストロークで恵梨沙のヴァギナを突き上げた。

「ひあああッ! しゅご……イイツ!! あっ、はああッ! 太いの、ヌルヌル擦れて、あああッ、奥に重いのが、んぐううッ、いっぱい来るう!! ふああッ、こんなの、ああッ、激しッ。激しすぎるけどッ、ああはあああッ、気持ちいいのおおッ!」

処女を失ったばかりだというのに痴漢の刺激に掻きほぐされた牝穴は、突然の強烈な衝撃を甘美として十分に受け止めていた。

「女の子の膣内ッ、気持ちいいッ。恵梨沙とエッチ、気持ちイイツ。電車で痴漢ッ、たまらない! ふああああッ、腰い、止まらないイイツ!!」

「はうううッ、あたしも、んくううッ!! まだ、膣内ッ、ジンジンするのに、奥う、ゴッンゴッン突き上げられるのッ、ふああッ、痛いのも気持ちいいのが、すごすぎるッ!」

二人の激しい突き上げに誘われるように、周りの痴漢カップルたちも一斉にストロークを激化させ、車内を狂おしい嬌声と淫臭に染め上げた。

その昂りがフィードバックしてきて、初々しく淫らな二人を過熱させる。

「涼鈴が好きになった、あ、ああ、男の子だけど……、お、ああ、洋太とのエッチ気持ちイイツ!! んはあつ、洋太に痴漢しちゃって、あ、ああつ、よか……つた、くふつ、あ、あああつ、来るう、あ、あああつ、なにか、奥から熱いの、お、ああつ、来るうつ!!」

「そんなつ、あ、あああつ、ちんこ強く絡みつかれたら、俺もツ、くふうつ、込み上げるの……ツ、もうつ、あ、あああつ、出るツ! 出ちゃううつ、うぐうあああつ!!」

どびゅつ、びゆるびゆる、どびゅどびゅどびゅううううううつ!

「はひつ、あ、あああつ、これつ、射精いいつ!! ふはあああつ、お、奥ううつ、熱いのツ、お、あ、あああつ、当たってるツ。洋太のイッパイ、激しくつ、ふあああつ、当た……つてツ、はつ、ああつ!! あた、し、い、くうあああつ、イクう、ああはあああつ!」  
しがみつくように締めつけてくる肉壁を激しい脈打ちで揺さぶりながら、尿道を押し広げるように狂おしい奔流が走り抜けた。

その荒れ狂う直撃を、怒張の乱打に追い詰められた子宮に食らって、恵梨沙は均整の取れた肢体を何度も痙攣させながら、快感の頂点に達した。

同時に車内でも、次々と悩ましい嬌声を上げて絶頂に達してゆく。



「ひはああつ、んああ、い、いいいっ！ 先っぽでワレメ、ぐりんぐりんしてくるうっ!!  
ふあ、ああ、やつぱり、洋太のおちんぽおおつ、あ、あああ、イイイッ!! 膣内なかこなくて  
も、ふああああつ、子宮喜んじやつてるううっ!」

「はうううっ、恵梨沙ちゃんに激しくしてるから、柚子のお股も、あ、ああああつ、いっ  
ぱい擦られちゃってるっ。気持ちいい部分っ、ずっと擦られっぱなしっ。はうん、もう、  
奥のウズウズなところっ、溢れそうに……なつて……る、あ、はああああつ!!」

滴り続ける愛液にぬかるんだ鋭敏なクレパスを手加減なく掻き乱され、二人ともいつ絶  
頂してもおかしくないほどに歓喜している。

「膣内に、来ないからっ、あ、あはあああ、いつまでも、終わらないいいいっ。ワレメの  
気持ちよさあ、ずっと続いて、んああ、変に……なりそうっ。このまま、おかしく……は  
ああああつ、なりそうっ」

「んくうううっ、柚子も、あ、ああああつ、イケそうなのにつ、ふあ、擦れる感じが、ず  
つとこのまま、あああつ、続きっぱなし、なつちやつてるっ。おちんちん、膣内なかに來ない  
ままっ、ふあ、あ、ああああつ」

快感は十分に得ていながらどうしても、膣壁を掻き乱し子宮を突き上げるような絶頂へ  
の決定的な切っ掛けとなる刺激が欠けていた。

(俺も、射精……込み上げてきてるのにつ。出そうで、出る切っ掛けの刺激ないからっ)

「このままだと漫然と同じ刺激が続くだけで、次第に勢いを失いうやむやに静まってしま  
いそうだ。」

そんな焦りに洋太がストロークを一段と勢い付かせ、彼女たちが腰をくねらせるが、や  
はり決定的な衝撃が得られない。

（このまま、駅に着いたら……俺、降りなくちゃならないしっ！）

時間も余りなく焦る中、

「うわっ！」

「きゃあっ」

「はううっ!!」

何かトラブルでもあったのか、列車が耳障りな軋み音を響かせて急ブレーキを掛けた。

驚きの声を上げてよろけた途端、

「きふああっ！ はあうううっ、そこお、あああっ!!」

全力のストロークが逸れて、亀頭の先端がワレメの上端でショーツの下に脈打ち強張る  
陰核をグリつと穿った。

「あひいいんっ!! んく、あああっ、ダメええっ！」

柚子もまた、恵梨沙にしなだれかかるようにつんのめって、高速ストロークする節くれ  
立った幹肌に、クリトリスの部分を押し当ててしまった。

「かひいいいいいっ！ んあつあああああつ、だ、めええ、これ、ふあ、あああ、しゅご、んあ、はああつ、奥つ、んお、あ、ああああつ、来るッ。こんな、気持ち、い、あ、ああうううつ、イクう、あ、ああ、イクうううううううううッ!!」

最も鋭敏な陰核粒への激しい刺激に、停滞して渦巻いていた快感が一気に弾け、恵梨沙が狂おしく身悶えて絶頂した。

「んはああああつ、んいいいっ、お股のお豆えええ、気持ちイイの弾けつ、ふあ、あ、イクッ。柚子ううんああ、ダメッ、ふおつ、ふはつ、は、あ、あああああつ。んいいいいいいイクうううううううううッ!!」

柚子もまた、秘裂で高まった濃密な甘美をクリトリスの快感で勢い付け、全身を痙攣させながら官能の頂点に達する。

「くは、あ、あああ、二人……とも、イッてる。挿入いれてない俺のちんこで、二人いつべんにつ。くふ、あ、ああああ、俺も……ッ、んおおおッ!!」

どびゅどびゅうつ、びゆるびゆるびゆるつ、どびゅどびゅどびゅうーうーうーッ!  
急ブレーキに揺れる車内で絶頂にバランスを失って少女たちがますますよろける。

倒れそうになつて踏ん張った彼女たちの腿に、キツく圧迫された充血陰茎が、狂おしい灼熱の放出感で尿道を熱く染めながら夥しい量の白濁液をぶちまけた。

「はわあああ〜っ！ 洋太の精子いいッ!! くはつ、どびゅどびゅ出てるうつ。いっば



いつ、は、ああああつ！ あたしのパンツに、たっぷりかかっているうっ」

「ああ、柚子のお股にも、いっぱいどろどろ流れてきて染み込んでくるうう。洋太くんの真つ白おツユツ。くふつ、はあ、ああ、濃くてべつとりしたの、ねっとり張りついて……。ん、ふあ、青臭い匂いいい、むんとして、おかしく……なりそお……ッ」

「あ、はああ、膣内に出されたんじゃないのに、流れ込んできて、奥まで……来ちゃいそう。洋太の精液い……」

大量の精液を放った熱く浮き立つ快感の余韻と脱力感にへたり込みそうになる中、恵梨沙と柚子は、べつとり下着を汚して女陰にまで染み入ってきているスペルマの熱感に、声を弾ませてはしゃいでいた。

（は、あ、あああ、膣に……挿入しなかった……けど、これじゃ……。射精目一杯ぶちまけて、恵梨沙と柚子の股間ドロドロに汚しちやってるし、セックスと、ほとんど変わりない……）

淫靡な関係を弱めるどころか、スマタの新たな快感を知ってますます彼女たちを夢中にさせたような気がする。

脱力感に荒い呼吸を繰り返していると、洋太の降りる駅に止まるため電車がさらに速度を落とす始めた。

「ふあ、また洋太に気持ち良くされちゃった。やっぱり洋太のおちんちん、すごく、あ



たしと相性いいわ。また、したいなあ。今度は、膣内までたっぷり、ね」

慌ててペニスをズボンの中に仕舞い、乱れた衣服を整えていると、恵梨沙がウツトリとした眼差しで次の誘いをしてくる。

「だ、だから、こういうことは、もうだめだってば……」

挿入しないことでセックスはもうこれ以上やめようと伝えつつもりだったが、むしろ彼女の情欲を昂らせてしまっていた。いやそれ以前に、洋太自身がスマタの快感に歓喜して、今度はまた膣内に怒張を突き込みたいという欲求を抱いてしまっている。

「涼鈴ちゃんと仲良くなれるかもしれないという欲求を抱いてしまっている。ぶち壊しにしちゃったから、お詫びにこれからも柚子が洋太くんとエッチしてあげるからね♪」

そんな内心を見抜いたのか、柚子が無邪気に告げてくる。

「あの子のことは別にいいから。それよりも俺には構わないでくれってば……」

「もちろんあたしも慰めてあげるから。そうだ、洋太が性欲催した時いつでもあたしたち呼び出せるように、携帯番号とメールアドレス交換しよ！」

「お、おいつ、勝手に俺の携帯。か、返せってば……」

洋太が何を言ってもさっぱり聞かず、恵梨沙と柚子は彼の鞆の中から携帯電話を取り出すと、勝手に連絡先を交換してしまった。

「これでお互いいつでも、エッチしたくなったら時は呼び出し合えるわね」

渦巻く快感に脈打ち続ける子宮が射精の噴流に打ちのめされ、涼鈴が絶頂の痙攣を激しくさせた。

「んひい、う、ふあ、あ、はあああつ、洋太くんっ、これ、は、ああああつ、これええ、射精っ。洋太くんのおちんちんから出た、精液いいっ!？」

「あ、ああつ、出ちゃった。射精っ。涼鈴の膣内ッ。我慢出来なくてっ、中出し、しちゃったああつ」

避妊する余裕もなくぶちまけた快楽のスペルマに、いまさらながら腰を退いてペニスを膣から抜こうと焦る。

「はあううううっ、嬉しいッ!!」

「くふああつ、涼鈴いつ？」

だが膣イッパイに濃度が高い白濁の塊汁を生でぶちまけられた少女は、洋太の腰に脚を絡め、さらに腰を迫り出して深々と射精怒張を啜え込んだ。

「嬉……しいッ。洋太くんの、赤ちゃん出来ちゃうおちんちん汁、わたしの中に出してくれたああつ。ふあ、まだ、ビクビク動いてるッ、洋太くんのおちんちんっ。まだ、中にいっばい出して……、はうっ、あつ、はあああッ!」

長い射精を続ける少年の勃起肉を奥まで啜え込み、膣口の隙間からポトポトと濃密な白濁液がこぼれ落ちた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※主人公は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!